

故人とのエピソードの想起に伴う主観的特性と継続する絆

—故人との継続する絆の適応性における自伝的記憶のはたらき(2)—

○田上恭子¹・山中亮²

(¹愛知県立大学看護学部・²名古屋市立大学大学院人間文化研究科)

キーワード：継続する絆，自伝的記憶，死別

Continuing Bonds and Subjective Properties Associated with Remembering an Episode with the Deceased

Kyoko TAGAMI¹ and Akira YAMANAKA²

(¹School of Nursing & Health, Aichi Prefectural Univ., ²Graduate School of Humanities and Social Sciences, Nagoya City Univ.)

Key Words: continuing bonds, autobiographical memory, bereavement

目的

昨今、死別への適応には記憶が決定的な役割を果たしていることが論じられている (Eisma et al., 2015)。本研究では、死別への適応における故人との継続する絆に着目し、故人に関するエピソードの想起における主観的特性と絆との関連を検討することを通して、絆の継続における記憶のはたらきを明らかにすることを目的とする。

方法

1. 調査対象者と手続き

株式会社クロス・マーケティングのリサーチ専門データベースにモニターとして登録している一般成人 1,107 名を対象に実施した精神的健康状態に関するスクリーニング調査の結果、健康状態が良好かつ死別経験及び本調査への協力意思を有する者 667 名の中から 400 名を本調査の対象とした。調査の実施は同社に委託した。なお本研究は名古屋市立大学人間文化研究科研究倫理審査委員会の審査・承認を受け実施した。

2. 調査内容

1) 死別体験内容: a.故人との続柄, b.死別年, c.故人の大切さと親密性, d.死別の予期, e.死別時の苦痛, f.回復の程度。

2) 故人との継続する絆: 日本語版 Continuing Bonds Scale (以下 CBS; 中里他, 2008) を用いた。11 項目 5 件法。

3) 故人とのエピソードの想起に伴う主観的特性: 故人とのエピソードを 1 つ想起してもらい (内容の記述は求めなかった), その想起に関して記憶の主観的特性質問紙 (関口, 2011) の一部を用い測定した。用いた項目は, a.想起時の状態・感情 16 項目 (5 因子, 7 件法), b.想起の視点 1 項目 (視野視点, 観察者視点, 両方の 3 件法) であった。

このほか、死別反応に関する項目が含まれた。

結果

有効回答 390 名(男性 194 名, 女性 196 名; 平均年齢 54.65 歳, 年齢範囲 18-85 歳)を分析対象とした。

1. 故人のエピソードの想起に伴う主観的特性に対象者の属性及び死別体験の内容が及ぼす影響

想起時の状態・感情の 5 因子中、「情動価」に関して $\alpha=.37$ と低い値であったため、この因子についてはポジティブ感情、ネガティブ感情の 2 項目の得点をそのまま用いることとした。性差については、「言語的詳細さ」で女性が有意に高いことが示された ($t(388)=2.08, p<.05, d=0.21$)。年齢と「再体験感」との間で有意な正の相関が認められた ($r=.15, p<.01$)。

故人との続柄(回答の多かった「親($n=227$)」「祖父母($n=88$)」「配偶者・パートナー($n=25$)」を分析対象とした)間で想起時の状態・感情及び想起の視点を比較したところ、「言語的詳細さ」「感情強度」で有意な主効果が認められ ($F(2,337)=4.91, MSe=15.19, p<.01, \eta^2=.03; F(2,337)=3.42, MSe=8.72, p<.05, \eta^2=.02$)、配偶者等>親, 祖父母との死別者であった ($p<.05$)。死別体験内容の量的変数との相関は Table 1 に示した結果となった。想起の視点間で死別体験変数を比較した結果、いず

れも有意差は認められなかった。

2. 故人との継続する絆と想起の主観的特性との関連

想起時の状態・感情と CBS との相関を求め (Table 2), 独立変数を想起時の状態・感情, 従属変数を CBS とする重回帰分析を故人との続柄別に行った。親との死別者では、「知覚的鮮明さ」($\beta=.25, p<.05$), 「再体験感」($\beta=.24, p<.05$), 「ポジティブ感情」($\beta=.21, p<.01$) の正の影響が有意であった ($R^2=.43, F(6,220)=27.32, p<.001$)。祖父母との死別者では、重回帰モデルは有意であったが ($R^2=.37, F(6,81)=7.90, p<.001$), 「ポジティブ感情」($\beta=.19, p<.10$) の影響が有意傾向であるのみであった。配偶者等との死別者では「ネガティブ感情」($\beta=-.61, p<.10$) の負の影響が有意傾向であったが、重回帰モデルは有意ではなかった ($R^2=.28, F(6,18)=1.16, p=.371$)。想起の視点と CBS とに有意な関連は認められなかった。

考察

故人との絆はポジティブな感情を伴う想起と関連することが示唆されるが、故人との関係性によって絆における記憶のはたらきは異なると考えられる。配偶者等との死別者数が少なかったこともあり、今後さらなる検討が必要である。

引用文献

- Eisma, M.C., et al. (2015). Psychopathology symptoms, rumination and autobiographical memory specificity: Do associations hold after bereavement? *Applied Cognitive Psychology*, 29, 478-484.
- 中里 和弘他 (2008). 日本語版 Continuing Bonds Scale (「故人との絆の継続」評価尺度) の作成 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 376.
- 関口 理久子 (2011). 自伝的記憶想起に伴う現象学的・主観的特性について—自伝的エピソード記憶の主観的特性質問紙を用いた検討— 関西大学心理学研究, 2, 7-17.

謝辞

本研究は科研費 (課題番号 26380935) の助成を受けた。

Table 1 想起時の状態・感情と死別体験内容との相関 ($N=390$)

	鮮明さ	詳細さ	再体験	強度	ポジ	ネガ
経過年	-.03	-.04	-.01	-.03	-.10*	.01
大切さ	.19***	.12*	.20***	.14**	.06	.05
親密さ	.20***	.15**	.22***	.15**	.12*	.03
死別の予期	-.01	-.05	-.01	-.06	.05	.00
死別時の苦痛	.23***	.16**	.21***	.16**	.15**	.06
回復の程度	-.25***	-.22***	-.21***	-.23***	-.07	-.14***

注) * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table 2 想起時の状態・感情と CBS との相関 (故人との続柄別)

	鮮明さ	詳細さ	再体験	強度	ポジ	ネガ
CBS						
親	.61***	.41***	.60***	.48***	.49***	.06
祖父母	.56***	.42***	.51***	.51***	.36***	.30**
配偶者等	.17	.34*	.08	.11	.08	-.35*

注) * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$